

議 事 録

会議の名称	第2回三田市総合計画審議会第2部会
開催の日時	令和3年7月16日(金) 18時30分～20時40分
開催の場所	三田市役所本庁舎3階302会議室
出席した委員の氏名	田邊部会長、足立副部会長、奈良委員、下中委員、里中委員、的場委員、馬場(路子)委員、大坂委員、高崎委員
欠席した委員の氏名	川邊委員、佐藤委員
出席した庶務職員の職及び氏名	田中市長公室長、太田政策課長、山谷総合計画策定担当課長、靱井政策課係長、志水政策課事務職員 【所管課等】 曾根市民協働室長、脇田共生社会推進室長、横溝文化スポーツ課長、寛長健やか育成課長、吉本地域福祉課長、梶谷生活支援課長、鶴障害福祉課長、西脇いきいき高齢者支援課長、藤田国保医療課長、榎本都市政策課長、青野公園みどり課長
傍聴者の人数	1名
議 題	1 いつまでも学び、活躍できるまちづくり 2 障害のある人の安心 3 心つながる暮らしの安心
会議の概要(結論)	・「いつまでも学び、活躍できるまちづくり」、「障害のある人の安心」、「心つながる暮らしの安心」について意見交換を行った。
公開・非公開の区分	公開
使用した資料	次第 資料1 2 第5次総合計画基本計画素案作成シート 「いつまでも学び、活躍できるまちづくり」「障害のある人の安心」「心つながる暮らしの安心」
連絡先	市長公室政策課 電話(079)559-5038 内線(2211)

1 開会

＜志水政策課事務職員の司会により開会、配布資料の確認等＞

2 議事

(1) いつまでも学び、活躍できるまちづくり(地域創生部市民協働室)

＜曾根市民協働室長から資料に基づき説明＞

＜意見交換＞

委員：「スポーツ施設を整え全国大会の誘致」とあるが、毎年開催される継続した大会が市内で開催されるとまちの知名度があがる。

委員：以前に「ゆうゆうウォーキングマップ」として3地区版を作っており、良い取り組みだと感じていたが、最近は同様の取り組みをしているのか。

事務局：市内10か所で三田市ウォーキングコースを整備しており、看板も設置している。

委員：農業も体を動かすのでここでも触れてはどうか。また、有機農家や小規模のノウハウを引き継ぐような体験を個人的に行っているが、今後継承していくうえでアーカイブ保存も必要ではないか。

委員：大学生が所属する「三活隊」で活動しており、カフェ狭間で農家の方から話を聞いたが、小規模農業で余っている作物が多くあるとのことだった。そこで、若者の力で余った農産品をどうにかしたいと考え、マッチングサイトを作っている段階である。

事務局：カフェ狭間の話が出たが、コミュニティセンターで農産品販売も行っており、マッチングサイトでつながる相手として、地域に販売し還元するのも良いかと思う。

副部長：リカレント教育、活動している人が学ぶ場として、生涯学習カレッジがある。農業や「三活隊」の話も出たが、生涯学習カレッジに創業支援コースがあるので、あらゆる人が教え学ぶ場として活用してはどうか。

委員：学びの輪として、編み物サークルを行っている。ヨガ教室、お菓子づくり教室、料理教室も行っており、初めて教室の先生をする人も多い。起業の前段階として、先生デビューができる場が生涯学習カレッジにあれば良いのではないか。

事務局：三田市では生涯学習カレッジを実施しており、生徒は全員高齢者である。創業支援コースの生徒は数名のみである。

委員：高齢者にしても、動ける高齢者とそうでない高齢者がいる。センター等の施設に通っているのは元気で動ける高齢者だけで、そうでない高齢者はどうするか。オンラインが一番良い手段ではあるが、高齢者には難しいので、集落ごとに先ほどのような教室があっても良いのではないか。若い人が高齢者にトレンドを教えて、動ける高齢者が出前講座で動けない高齢者に教える環境になれば良いかと思う。

部長：個人で市民向けに教室を実施している団体はどれぐらいあるのか。

委員：高平で教室を実施しているが、数は把握していないが、実施している人たちでゆるやかにつながっている。広報さんだでのPRを活用している。適応障害の居場所づくりの財団法人ができたが、広報さんだでPRをする等、こういった活動を市民にPRして活用してもらうことが大事ではないか。

部長：市のバックアップがあれば、より活動が広がっていくのではないか。適応障害や発達障害の方の居場所づくりは重要だと言われているが、市内に多世代で集まれる場所があると良いと思う。

委員：あらゆる障害を持たれた方の活動できる場所が市内に点在すると良いと思う。様々な場があれば才能の発見につながりやすい。

部長：意見を整理すると概ね次のとおり。

- ①毎年開催される継続したスポーツ大会が市内で開催されるとまちの知名度があがる。
- ②農業ブームを活用して教え、学ぶ場や機会を提供してはどうか。コミュニティ単位のつながりを大事にしていくことにより、地域や若者ともつながっていくことができる。
- ③学ぶ場として市には生涯学習カレッジがあるが、参加できない方への学習機会の提供についても考える必要がある。そのため、高齢者の生活圏ごとに小規模で利用しやすい学びの場が

できていけば良いのではないか。なお、この点には、次のことが期待できると思う。

- ・ 今後は市がバックアップしていくことで、個々の活動が面として広がっていくことが期待できること。
- ・ このような場を通して若者とつながることで、高齢者と若者の意識ギャップがなくなること。

④障害者の居場所づくりは、活動を点在させていくことで人の交流が活発になり、まちの活性化につながるのではないか。

(2) 障害のある人の安心（福祉共生部共生社会推進室）

＜脇田共生社会推進室長から資料に基づき説明＞

＜意見交換＞

委員：障害者の方にとって働くことがゴールではないので、働けない人も幸せにできる環境づくりが大切ではないか。

委員：ボランティアグループに所属しているが、どのグループでも会員の高齢化に悩んでいる。若い時から福祉の勉強、福祉学習を深めてもらうことは大切ではないか。先日、発達障害の状況を疑似体験した。地域で、障害について体験する場、接する場、学ぶ場が増えていくと、安心して暮らせるのではないか。地域でまず理解してもらうことが大事だ。

部会長：神戸電鉄の中吊り広告で発達障害について説明したものがあつた。学びの場、情報発信は継続していくことが大事である。発達障害は外見からわからない障害、そういった理解を深めることが大事だ。

委員：わからない障害など各個人様々な事情がある。地域を巻き込んで理解してもらえるようにして欲しい。関西学院大学では、障害者へのサポートが手厚いので、そういったことが地域でもできればよいと思う。

委員：外見だけでは発達障害か登校拒否かはわからないし、聞くこともできない。

部会長：障害に対して地域で理解していくといった話を進めてきたが、次に障害者本人主体がどう活躍するかといった視点に変えたい。

委員：身近に発達障害の人がいるが、その方は自身が居場所づくりに参加しているし、他の居場所づくりのお手伝いもしている。また、結婚について、特性として自分の思いを伝えることが苦手なので、結婚についての支援ができないか。

部会長：地域の中での居場所、障害者本人が住みたい場所に住めるということも保証しながらの居場所づくりが必要ではないかと思う。

副部会長：情報がキーワードになるかと感じた。広告の話もあつたが、障害の種別は様々ある。スマホ等を活用してあらゆる人に情報提供していくことが大切だと思う。「ミライロID」というアプリでは、障害者手帳の情報を管理できるほか、障害者の欲しい生活情報などの情報提供ができるようにする取り組みが進められている。

委員：医師が接する障害者の多くは身体障害者であり、働くことができない。三田市だと小中高で支援学級があり、障害者が学ぶ場があるので、今後も続けて頂きたい。障害者へのサービスに取りこぼしがないようにすることが重要である。

委員：障害者について詳しくないが、特に重度の障害者に対して、私たちに何ができるか、どのような手伝いができるか、そういったことを市民が学ぶ場があれば良いと思う。

事務局：福祉学習について、学校では教育の一環でやっていると思うが、まず障害がある人を知ってもらうことが大事、社会福祉協議会でボランティア活動センターをやっている。

委員：社会福祉協議会では、依頼に応じて出張福祉教室を開催している。

部会長：大学における障害者への取り組みは充実しているので、そのノウハウを市民が学ぶということができればおもしろいと思う。

委員：相互理解の取り組みについて、高価な器具のレンタル費用を市が補助してはどうか。「障害者を抜きで決めないで」といった声も聞くので、障害者の声に耳を傾けることも大事だと思う。

事務局：会員の高齢化の話があったが、子ども手話教室を行っている。子どもの頃から障害者と触れ合うことが大切だと思う。

部会長：意見を整理すると概ね次のとおり。

- ①福祉ボランティアの高齢化、担い手をどうしていくか、また、若者をどう巻き込むかという課題があるため、若い頃からの福祉学習が重要であると思う。
- ②地域で障害者に対する理解を深めることが大事である。そのため、地域で障害について体験する場、接する場、学ぶ場が増えていくと安心して暮らせるのではないか。
- ③地域の中での居場所、障害者本人が住みたい場所に住めるということも保証しながらの居場所づくりが必要ではないかと思う。
- ④障害の種別は様々ある。意思疎通のツールとしてスマートフォン等を活用してあらゆる人に情報提供していくことが大切だと思う。アプリを活用し障害者の欲しい生活情報等の情報提供ができるようにする取り組みを進めてはどうか。
- ⑤身体障害、軽度や重度に関わらず、セーフティネットとしてとりこぼしのないサービスの提供が必要である。器具のレンタル助成など、障害者の声に耳を傾けながら、それぞれの状態に応じたきめ細かいサービスを実施して欲しい。

(3) 心つながる暮らしの安心（福祉共生部共生社会推進室）

< 脇田共生社会推進室長から資料に基づき説明 >

< 意見交換 >

委員：カルチャースクールを色々しており、スクール後に集まり、招きあう文化、おせっかい文化になっている。きっかけの作り方が大事ではないか。

委員：ニュータウンに住んでいるが、隣近所のことはわからない。特にニュータウンでは、おせっかいを嫌がる人も多い。おせっかいをすることで近所関係が悪化する事もある。

部会長：「おせっかい文化」の言葉が出てきた経緯を確認したい。

事務局：暮らしの安心を考えるうえで、課題解決型の支援は必要だ。望まない孤独が今後増えていくことから、伴走型支援を今後していく必要がある。取り組むにあたり、以前だと人間関係が濃かったが、現在は希薄化しており、人と人とのつながりとして、おせっかいの重要性を伝えていきたい。

委員：神戸市のニュータウンでは、隣近所の関係性は希薄だが、ブロックごとの自治会があり、連合自治会がある。各自治会が高齢者に災害時の支援の必要の有無を聞き、支援が必要な人の家をマッピングした。顔見知りでない、ニュータウンでは自治会で情報共有をし、いざというときに助けられる環境を作っている。

委員：社会福祉協議会では地区ごとに高齢者サロンやっているが、参加されない高齢者をどうするか

という課題がある。地区特性がある中でほっとできる場所があれば良いと思う。

部会長：8050問題はどのように考えているか。

委員：声をかけにくい状況であり、サインが出ていない人、つながりたくない人をどのように把握していくかが課題である。

副部会長：足立区ではおせっかい文化の取り組みが行われており参考になると思う。条例やマニュアルを作成し協力員に声掛けをしてもらっている。

委員：つながりを拒む理由は、その人にとってつながる先が関心のないことだったのではないかと思う。つながりたいときにつながれる状況が大切だと思う。活動をオープンにすることで、いつでも来られるような環境にすることが必要だと思う。

部会長：意見を整理すると概ね次のとおり。

- ①「おせっかい文化」の醸成は、地域特性をまず理解することが大事で、年齢別、地域熱によって実施手法は変えていく必要がある。
- ②どのように地域とつながっていきけるか、また、地域とつながるためのサインを出していない人や出しにくい人、つながりたくない人への支援をどうしていくかが課題である。
- ③足立区では「おせっかい文化」の条例やマニュアル作成など既に取り組みを実施しており、参考にしてはどうか。
- ④つながりたいときにつながれる状況が重要であり、そのためには、活動の可視化によりいつでも来られるような環境にすることが大切だと思う。
- ⑤孤立と孤独をどう考えるか。孤立孤独にならないための予防、孤立孤独の状態にある方への支援といった2つの対応が重要だと思う。地域の生活単位にいか「おせっかい文化」を落とし込むかが今後大切だと思う。

2 その他

次回7月20日(火) 18:30~21:10